県産「海ブドウ」に期待

遠く離れた沖縄の高級食材「海ブドウ」が、尾鷲の特産品として身近に入手できるようになるかもしれない。

尾鷲市内の中部電力三田火力発電所跡地について有効活用の検討を進める「おわせＳＥＡモデル事業」では、尾鷲商工会議所が農水分野の中心となり、尾鷲湾の海水を利用した海ブドウの陸上養殖を目指している。試験栽培は県水産研究所尾鷲水産研究室で５月から開始し、６月に約７００グラム、７月には約１・４キロが収穫できた。

海ブドウの年間生産量は、全国１位が沖縄県で、２０１８年は３６４トンとなっている。尾鷲では、早ければ２１年に施設の整備を始め、まず年間１トン、将来的には１０トンの生産を目指すという。

当社も事業の一部サポートをしているが、県内の飲食・宿泊業者からは、本州では目新しい食材が身近に入手できることに期待の声が聞かれる。ある事業者は、料理に県産品をより多く取り入れていきたいものの、漁業者の減少に伴い市場で扱う魚種が減っているという。海ブドウの生産が軌道に乗れば、県産品の利用促進という面でも貢献できそうだ。

また、海ブドウの養殖が尾鷲の新たな産業となれば、雇用創出につながることも期待できる。ただし、安定した雇用につなげるには、通年で生産・出荷できることがポイントになる。海ブドウの生産は、水温が低下する冬場は難しい。この期間の加温や他品種の生産、加工・販売方法などの検討が、事業化するうえでの課題だ。

海ブドウは摘み取り体験など観光促進にも希望が持てる。海ブドウ養殖が実現し、尾鷲の地域活性化につながる新たな産業として成長していくことを期待したい。

（コンサルティング事業部 調査グループ　研究員　額田 夏生）

毎日新聞「三重～る経済」　2020 年８月 11 日